



近年、高層ビルの建設を中心に据えた再開発が大都市圏で相次ぎ、街の風景は急速に変わりつつある。生活の利便性は高まる一方で、都市空間の均一化が進み、街の表情は乏しくなっているのではないだろうか。京都の繁華街に存在する集合建築である〈会館〉から、現在の街づくりが学ぶべき空間の奥ゆきを考察する。

Special Feature The Power of Traditional Life Part 5

〈会館〉という迷宮

京都の集合建築に学ぶ都市の奥ゆき

加藤 政洋
Kato Masahiro

集合建築としての〈会館〉

まず、一枚の写真をご覧いただきたい（左頁上）。阪急京都線西院駅の近傍に立地する、立ち呑みを中心とした飲食店の集合建築である。角地の土地区画にあって、角を切ったファサードの正面に掲げられた大きな看板が、ひ

ときわ目を引いている——その名も「折鶴会館」。内部は2本の通路を挟んで店舗が並び、最奥には共同のトイレがある。その雰囲気は、まるで闇市を起源とする飲み屋街のようだ。

近年、酒場を特集する関西のローカル誌では、「折鶴会館」をはじめ、「新宿会館」や「四富会館」といった、「会館」と名のつく同種の集合建築が取り上げられることも増え、それらの店

舗で若い女性が独り呑む姿も珍しい光景ではなくなってきた。

〈会館〉と称する飲み屋の集合建築は、2015年11月末現在、京都の中心市街地だけでも60件を超えている。けれども、メディアに登場するごく一部の〈会館〉を除くと、観光客はもろろん、地元の人々の目に入ることも少ないのではないだろうか。〈会館〉という建築とその呼称は、京都に固有というわけ

ではないものの（大津市・大阪市・神戸市などにも分布している）、かといって一般に馴染みがあるわけでもない。〈会館〉のように特定の機能の集積する建築空間を考えると、たとえばオフィスビルや集合住宅、あるいはスナックやクラブの入居する雑居ビルなどが想起される。このとき、京都の〈会館〉に関して注目すべきは、例外は少なからずあるにせよ、本来は商家や住



京都市西院にある「折鶴会館」。複数の飲食店が入居する、〈会館〉と呼ばれる集合建築の典型例だ。



〈会館〉の構造。町家に通路や階段を設置することで、複数店舗の収容が可能になる。1Fは10店舗、2Fは4店舗入居できる。



目度も高いのだろう。

〈会館〉の出現とひろがり

では、飲み屋の集合建築としての〈会館〉は、いつ、どこで成立したのだろうか？ 詳細は省くが、京都では最初となる昭和31（1956）年発行の『住宅地図』を中心に、諸種の資料・地図類を検討して明らかとなるのは、1955年を前後する1、2年のあいだに、「西木屋町」と通称される街区に発生した、ということである。西木屋町とは、南北を四条通と三条通に、東西を高瀬川と河原町通とに囲まれた、いまも変わらぬ夜の街だ。

各年版の『住宅地図』にもとづいて、〈会館〉の立地件数を5年ごとに集計してみた（Chart）。それによると、期間別の最多は1961～1965年期の41件、次いで1981～1985年期の23件、1976～1980年期の21件、1971～1975年期の20件、1966～1970年期の12件、1961～1965年期の41件、1956～1960年期の18件と続く。

昭和60（1985）年までは、各期平均約23件の〈会館〉が誕生し、一貫して累積傾向にあることがわかる。ところが、バブル経済を境に潮目が大きく

く変わり、成立数は激減、既存のストックも取り壊しが進んで、〈会館〉は減少へと転じたのだ。

結果だけを見るならば、戦後京都に登場した〈会館〉は総計で148件である。150件近くの〈会館〉が成立したとはいえず、それらが市街地にまんべんなく立地展開したわけではない。では、どのような場所に立地したのか？

〈会館〉の分布を整理したのがChart 2である。これによると、四条河原町の交差点を中心とした商業地区（とりわけ東部）と、歓楽街である西木屋町、そして西木屋町に接続した花街の〈先斗町〉、八坂神社の近傍にあつて同じく花街の〈祇園東〉界隈に顕著な集積がみられた。ところが、同じ市街地東部でも、これら繁華街の南側（具体的には五条通以南）と北側（具体的には御池通以北）には、まったく立地していない。つまり、旧来の繁華街とその周辺に集中したことになる。〈会館〉は立地を選ぶのだ。

市街地の西部に目を向けると、西大路通を軸線として北は金閣寺付近、南は八条付近まで分散的に立地しているが、そのなかで複数の〈会館〉が集まっているのは、「折鶴会館」の位置す

る西院付近だけであった。市街地中部（具体的には堀川通）についても、北は北大路通から南は七条通まで分散しており、同じく複数の〈会館〉が立地したのは四条大宮付近だけである。西院も四条大宮も、阪急京都線の駅を中心に交通の結節点である。

集合建築としての〈会館〉は、最初期には発祥の地である西木屋町とその周辺で集積が進んだ（全期間を通じて34件立地）。その後、近接する花街の〈先斗町〉へと波及しつつ、最盛期の後半には〈祇園東〉周辺へと集積スポットを移し、あわせて繁華街の周辺や交通の結節点にも展開したのだ。

花街の変容と〈会館〉の進出

1960年代のすぐれた文学的ガイドブックである『京都味覚散歩』（白川書院、1963年）のなかで、著者の白井喜之介は、「近ごろは、祇園でも先斗町でもお茶屋や芸者の数は盛時の半分に近くなり、斜陽の感が深い」とある。あるいは「祇園や先斗町などの色町は、昔に比べて半分ぐらいに数が減ったが、反対にキャバレーやバーはなかなか数がふえている」と指摘している。

白井が名指した『先斗町』については、「この通りも近代化の波におさらバーのネオンがふえた」（『京都年鑑1963年版』163頁）とか、ある式のクラブやバーが激増し、他の花街とはまったく違った町に変わってしまいい、「歓楽街としての様相が濃くなったのだった」（『京都年鑑1972年版』175頁）。『祇園東』に立地した〈会館〉は18件、そのうち実に11件の従前の用途がお茶屋であった。

こうした語りがあらわれる時期に撮影された、『先斗町』の街景写真を参照してみよう（34頁）。中央部の張り出し看板を拡大してみると、手前の「ゲリラ開陽亭」と「水だき一粒庵」の向こう側に、「CLUB園」や「バー（BAR）」と書かれた小型の看板数枚を見ることが出来る。これらの看板にある飲食店

が入居していたのは、実のところ、元お茶屋を改造した「鴨川会館」ならびに「先斗町会館」であった。『先斗町』には、隣接する西木屋町の影響を受けて、昭和34（1959）年ごろから〈会館〉が登場し、累計で11件立地している。『先斗町』以上に歓楽街化したのが、同じ花街の〈祇園東〉である。「会館

Chart 1
京都における〈会館〉数の推移

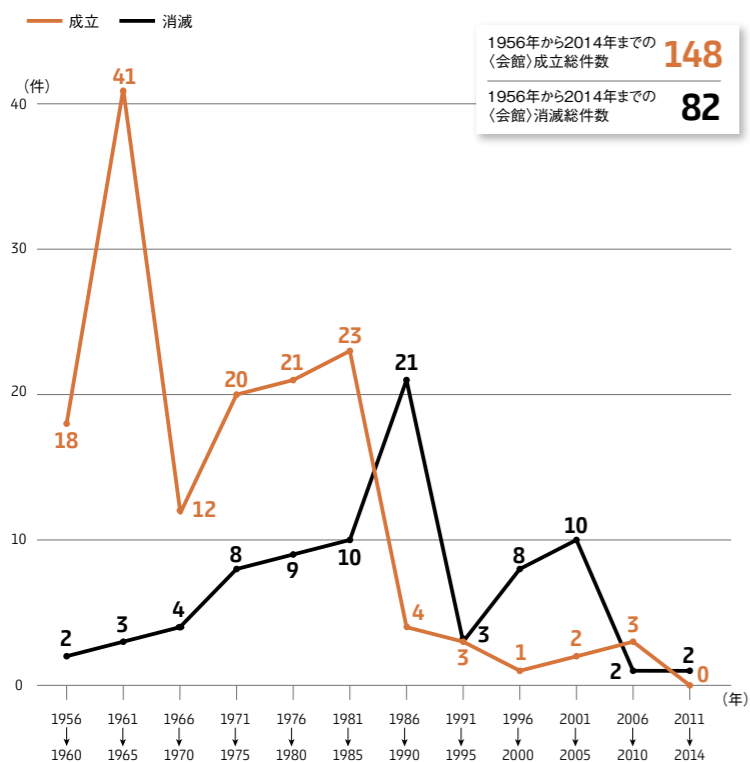
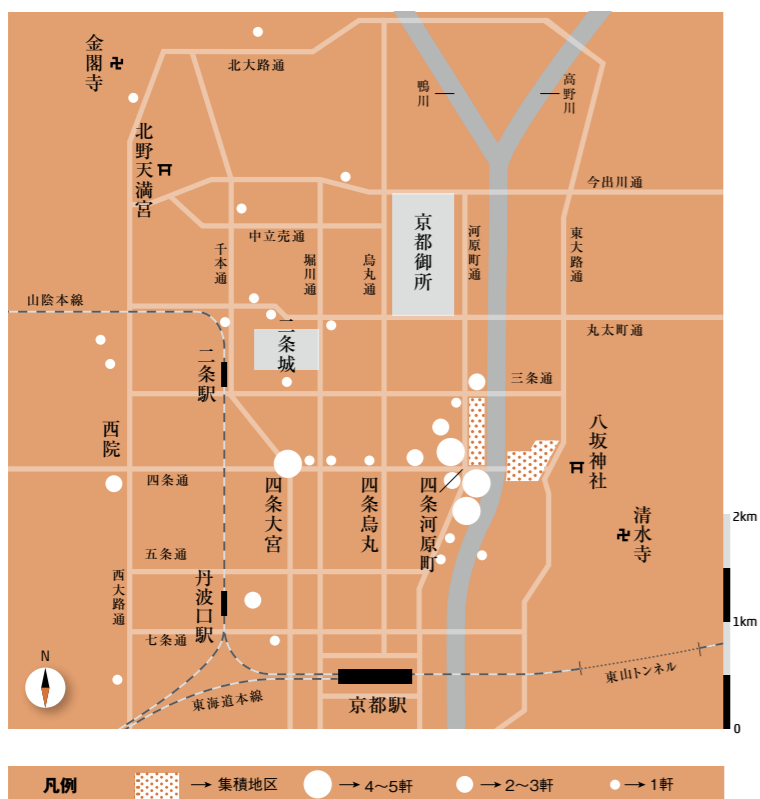


Chart 2
京都市内の〈会館〉の分布 (1956～2014年)



*〈会館〉は50年代以降に発生するため、1951年当時の地図を使用している。



1960年代の先斗町。
右奥に「鴨川会館」、
左奥に「先斗町会館」がある(上写真)。
茶色部分の拡大図(下写真)を見ると、
右は「CLUB園」「グリル/ピヤホールタカラ」
「BARレイ子」「BARえりか」「BAR酔族館」、
左は「バーバル」「バー千早」
「クラブ山脈」「クラブヤマ」という
看板がある。

都市の無意識

——《会館》の
立地と空間性

以上に概観したように、京都の《会館》は特徴的な立地パターンを有している。それは、二つの集積地区——西木屋町と《祇園東》——に示されるように、それぞれ周辺域を含む繁華街と花街であり、もうひとつは交通の結節点であった。同種のサーヴィス業や類似する複数の店舗（そのほとんどは飲み屋である）がひとつの建物に共存することから、集客のために交通の利便性や歓楽街のような周辺環境が必要条件となり、おのずと立地を選ばざるを得ない。

ここで重要なのは、累計で約1500件、現在でも約60件の《会館》がある

路地と《会館》の社会・空間的な類縁性は、そもそもなぜ京都に《会館》が多いのか、という理由とも関わってくるかもしれない。戦災が小さかった京都では、低層木造建築の町家が規模にストックされた。戦後、強制的な建物疎開の跡地を除くと、既成市街地における大がかりな（再）開発事業は実施されないまま、近代的な都市の空間構造が現代に引き継がれている。

その結果というべきなのであろうか、復興期・高度成長期を通じて空間需要が高まるなかで生まれたのは、既存の空間を細分化して利用するという発想であった。通常、空間需要に対応するためには、土地利用の高度化（建物の立体化）を進めるか、土地利用を外延的に拡大するほかはない。事実、他の大都市は一樣にその方向性を取った。

そうしたなかで、「古都の呪縛」というわけではないにせよ、町家を壊すことなく細分化して空間需要に応じてきたことは、たんなる発想の転換というよりも、むしろある種の空間発明と呼ぶほうがふさわしい。そこには、「どうなぶつても（どのよう）に手を加えても）構わない」という町家所有者の意識や現実の路地空間のありようのみならず、たとえば借家・間貸しといった文化制度、あるいは脱花街化する遊興の志向性なども織り合わされて影響を及ぼしたに違いない。

《会館》という京都固有の建築に具現

にもかかわらず、それらはなかば隠れこもった存在であることだろう。《会館》は、目的を持った来街者か、あるいは来店者にしか認識され得ないような立地と外観を呈している。それをミクロ地理的に見るならば、《関西の言葉を用いて言う》と、いわゆる表通りの「通り筋」ではなく、裏通りや路地奥に位置しているのだ。

象徴的なのは、《会館》の発祥地である西木屋町そのものが、空間的には「裏町」であるということだ。交通量の多い表通りには、一般の商店が建ち並ぶ。《会館》へ行くためには、路地を入ったその先に、繁華街の懐へと潜り込むように歩を進めなければならぬ。《祇園東》のような花街もまた、関連する営業が表通りでは禁じられていたため、街それ自体が裏町としてつ

した空間的想像力は、バブル経済を契機として急速に萎んでゆく。バブル期の終末、作家の邦光史郎は、「現在京都には古い町家をこわしてペンシルビルやマンションを建てる、まるで嵐のよ

くりあげられ、その引きこもるようなお茶屋の立地を《会館》が受け継ぐのである。

観光客をはじめとする来街者が目にするのは表通りであり、多少猥雑であったり、いかかわしなかったり、あるいは妖しさを醸す《裏》の空間を体験することは少ないだろう。通りすがりの来街者には触れることのできない空間性、あるいは固有の仕組み・制度を具備しているのが花街や裏町であるとすれば、わたしたちはそれを隠喩的に都市の「奥ゆき」として見立てることができるかもしれない。

実際、《会館》もまた、隠喩以上の「奥ゆき」がある。というのも、本稿の冒頭でわたしは、《会館》を「中通路と2階への階段を設置することで、旧来の町家を効率よく転用した建築」とだ

喪失」『日本経済新聞』1990年4月12日夕刊」と予測してみせた。前述のChart 1に示された趨勢変化が、邦光の観察した「京都こわし」の一面を捉えているとするならば、スクラップ



立ち呑み屋、スナック、バー、クラブ……
足を踏み入れるほど違う表情をみせる《会館》は、
多彩な空間を融合した都市の迷宮だ。

うな古都こわしの渦中にある」と述べ、「紅靱格子に飾られた京の町家と葺の波といった京都の景観は、今後数年足らずで、貧弱きわまりないコンクリート・ジャングルとなるだろう」（「古都

&ビルドによらない空間用途の変更、あるいは空間の細分化という発想に示された別様の活用方を、いまあらためて評価してもよいであろう。

さて、このように堅い文章で論じて

特集／昔の暮らし



Special Feature / The Power of Traditional Life

しまうと、《会館》の面白さを伝えるどころか、興味を失せさせてしまったのではないかと不安になる。最後にひとつだけ、《会館》の不思議に触れることで、本稿を閉じることにしたい。《会館》を観察していると、1階のエントランスに位置する路面店には、焼鳥屋やラーメン店のように、比較的に入りやすい飲食店が入居していることに気づく。そして狭く暗い通路の奥、あるいはこれまた暗い階段の上にあるのは、会員制のスナックなど、一見ではどういふ馴染むことなどできそうな店ばかりなのだ。

すると、《会館》は都市の無意識を映し出しているようにも見えなくはない。表通りから抜けられるかどうかさえわからない路地へ入る躊躇いを、《会館》の入り口で感覚することもあるだろう。《会館》は、歓楽街の縮図でもあるようだ。

裏町に立地する謎めいた集合建築《会館》——この空間に都市の無意識を読み、都市の智慧を学ぶことも、あながち無駄ではないと思うのである。

Kaio Masahito

かとうまさひろ／立命館大学文学部准教授。1972年生まれ。博士（文学）。専門は文化地理学。流通科学大学助教授を経て現職。著書に『神戸の花街・盛り場考』『敗戦と赤線』、共編著に『都市空間の地理学』などがある。